

## 研究

# 理論經濟學諸體系の方法論的考察

福 本 英 男

### (一)

從來の凡ゆる理論的思惟の歴史における轉回は、何よりも先づ、現實の研究の新らしい方法の必要の意識となつて現はれるやうに見へる。ひとは、それぞれの時代に對應して、著しく異なるところの形態と、従つてまた著しく異なるところの内容を有てる、一連の理論的思惟を知つてゐる。理論的思惟は、かくて、何よりも先づ、歴史的所産である。茲に、思惟の不變不動性を、ひと先づ、素朴にも表見的に、否定しておこう。

さて、かゝる理論的思惟の轉回は、本來如何に理會さるべ

きであるか。既にしてピカゴは、哲學體系の累積は、それ自らは解明するところが甚だ僅少である、と云つてゐる。第十七世紀に、*「フホンの『Novum Organon』とデカルトの『Discours de la methode』」*とが相呼應して現はれたと云ふことは、本來如何に理會さるべきであるか。……恰かも牛の如く、既得の知識を反芻するのみで、新らしき知識への永久の渴望者としてとゞまつた中世哲學の不毛性を救はんためには、この支配的な論理學を、認識論的方法論的に超克することが必要であつた。哲學は、この新らしい方法を求めて、既に存在を主張して、新らしい方法を適用して廣い分野に驚異的な業績を挙げつゝあつたところの自然科學に結びつかざるを得ない。たゞ、哲學の課題は、この方法を捕捉し、これ

に抽象的普遍的形態を與へ、かくて個別に用ひられつゝあつたところのものを科學的方法として定立することにあつたのである。ひとは、この解明によつて、哲學と自然科學との關聯に就いて、重要な會得をしたことにはなるであらう。近世の唯物論が、自然科學の領域において劃期的な發見が成されるたびに、如何にその形態を換へなければならなかつたかに就いては、われわれの充分に知るところである。それは、然しながら、この理論的思惟の轉回を、經濟的社會的關係の形象において解明したものであらう。われわれは、この問題を顧みつゝ、近世哲學の三つの轉向に就いて敍べなければならぬ。

近代哲學は、我の發見をもつて初つた。それは、有名な *ego sum*. といふ命題に要約されてゐる。神の存有は疑ひ得やう。我が思惟するところのものは疑ひ得やう。然しながら、思惟し疑ふ我そのものが在るといふことは洵に疑ひ得ないものである。ルネサンスの發見した個人は、近世哲學において、思惟するところの本質、自我、自覺せる精神、として定立された。とは云へ、近世哲學の我は、それ自らまた思惟された、抽象によつて媒介された、それ故に疑はれ得る、本質に過ぎないのである。すなはち、近世哲學の出發點となつた命題はこうである、我はひとつの抽象的な、ひとつの單に思惟するのみな本質であつて、肉體は我の本質に屬しない。

この抽象的な本質を去れ、とフオイエルバッハは云ふ。我はひとつの現實的な、感性的な本質である、及び、肉體は我の本質には屬しない、まことにその總體性における肉體こそ我の本質そのものである、と云ふ命題が、新たな哲學のために、茲に指定されなければならない。然しながら、再び、とは云へである。茲に感性は、實踐的な、人間的感性的な、行爲として捕捉されてゐない。感性の洗禮を享けた人間的本質は、歴史の流れから遊離した、抽象的孤立的な人間個人として顯はれてゐる。さうではない。それは、*gesellschaftliche Menschheit* として定立されなければならない。人間の本質の現實性において、それは社會的諸關係の總體である。抽象的孤立的な人間個人は、一定の社會關係に屬しなければならぬ。しかも、悉ゆる社會的生活は、本質的に實踐的である。これらの一定の社會關係はまた、人間によつて生産せられたものである。社會關係なるものは、生産力と密接に結びついてゐる。人間は、新たな生産力を獲得すると共に、その生産關係を變化し、生産關係を變化すると共に、その社會關係を變化する。社會關係を變化すると共に、一部は直接に生産關係により、一部は社會關係によつて規定せられた社會の人間の心理、この心理の性質を反映するところの諸種の精神的文化を變化するのである。

われわれは、問題の正しい出發點を與へられたのである。寔

に、ベユコンとデカルトとの屬した經濟的社會的關係は如何なるものであつたか。

## (一)

それは、近代のブルジョアジイの擡頭しつゝあつた時代である。ブルジョアジイは、その工業的生産の發展のために、自然物の性質及び自然力の作用の仕方を研究する科學、すなはち自然科學をもつとも必要とした。自然科學は、ブルジョアジイの生産的實踐によつて、力強く推し進められたのである。

十字軍以後、ヨーロッパの生産は奇蹟的に生長した。一六九七年にダニエル・デフォーが *projecting Age* と云ひ、時人が *Erfindereifater* と云つたのは、自然科學の悉ゆる分野に亘る力強い勃興に先行して、生産の領域において素朴な發明家の絢爛な時代が過ぎ去つてゐるといふ考慮のもとに、寔に多くを語るところの時代の徵表である。バロック時代の典型的な發明家と見られてゐるベツヒヤーは、發明 <sup>ドイスマインゼンチオ</sup> 的天賦においては風貌も職業もない、國王と農民、學者と無學者、異教徒と基督教徒、信仰者と不信仰者はひとしくこの才能を惠まれてゐるのである、と云つたが、これはその儘十七世紀の前後において實現されてゐる。あれわれは學者醫師の領域において、言語學者ヨハン・ハインリヒ・シュルツェの寫

眞、神學生リーの編物機、醫師エイリニスのアスファルト、ペンジャミン・フランクリンの避雷針等を、僧侶の領域において、デズイット僧ボナミのエナメル、説教師カートライトの機械機械、主任司祭ランリユエの生絲紡法の完成等を、手工業者、勞働者の領域において、理髮師アークライトの紡績機、大工ジョン・ハリソンのクロノメーター、勞働者デューゴールの最初の無臭鑿坑法等を、有つてゐる。しかも、これらは、時代の業績の片鱗に過ぎなかつた。バロック時代の徵表をなすところの、かの多角的發明家は、次の人々においてその頂角を極めたのである。

ゾマーセツト（一六〇一—一六七〇年）の制動裝置、時計、起重機、移動橋梁、拳銃、霰彈砲、安全錠、計算機、等。ド・レオーミュール（一六八三—一七六七年）の八十度盛式寒暖計、鐵、陶磁器、染色等の領域における諸の改革。ドニ・パン（一六四七—一七一四年）の空氣ポンプ、暖爐、遠心力ポンプ、高壓蒸汽機關。ヨアヒム・ベツヒヤー（一六三五—一六八二年）の靴下編機、紡絲機、檢温器等。これらの根本においては未だ經驗的有機的な方法に憑つた諸の技術は、然しながら、この時代に非常な完成を経験して、所謂量が質への轉化を遂げ、實際上生産にひとつの根本的な改革を齎した。機械の領域において、その最も代表的な例は、水力工場と、力の傳動裝置の發展とである。他方において、これらの

技術が齎した新事實は、尠大な觀察材料を提供したのみならず、またこれら自からが已に從來とは完たく異つた實驗道具となつたうへに、また新たな道具の組立をも可能ならしめた。本来の組織的な實驗科學は、いまや始めて可能となつたのである。

これらの生産と自然科學の發展に參したものは、最早傳統の文明を誇つたイタリアのみではなく、そこにはいまや西歐及びポオランドを含む中歐の全體があつた。自然科學はまた、完く營利の、従つて結局は生産の、目的で行はれた地理上の諸の發見によつて、著しく促された。それは、動物學、植物學、氣象學及び生理學に關する、これまで容易に得られなかつたところの無數の材料を明かにした。印刷機が現はれたのも、この時代である。洵にそれは、世界がそれまでに經驗した最も偉大な革命であつた。

ブルジョアジイは、かくて、生産力の發展と共に、中世紀的封建組織のうちに闘ひとつた公認的地位をもつてしても、最早この組織と兩立しがたきものとなつて行つた。まことに當時は、ローマン・カトリック教會が、封建制度の國際的大中心となり、封建化された西ヨーロッパ全體を、その悉ゆる内部的闘争にもかゝはらず、一大政治體に結びつけ、最後にはカトリック全土の三分の一の土地を所有することにおいて、悉ゆる封建君主のうち最大のものとなつてゐた。それはまた、觀念の世

界において、アックキノの聖トマスが聖なる神學に至めたところのアリストテレスを支配哲學の座にのぼした。かくてピウス第九世は肩を聳かせて、「凡ての人間は、何らかの意味において、カトリック教會に所屬する」と豪語し得たのである。ブルジョアジイは、世俗の封建制度を、それぞれの國において、餘すところなく解消し得るために、また自然科學が、教會の從順な羊たることをやめて、自らの獨立宣言を有つたために、何よりも先づ、この宗教的組織を解消しなければならなかつた。それには先づ、えたいの知れない教養がでつちあげた支配論理學を超克することが必要となる。ベエコンとデカルトとの方法論は、このブルジョアジイの闘争の前哨戦であつた。

### (三)

われわれはいまや、かゝるものとしての、この偉大な二人の名を負ふ、理論的思惟の特殊性を問題とする場合にある。それはまた、前述の事情から論理的に歸結し得るところでもある。ギリシャにおいて、自然はなほ全體として直觀されるにとゞまり、諸の自然現象の全體的關聯は、個々の點において證明されるにいたらなかつた。所謂辨證法的思惟は、いまだ自然成長的な單純性を有つて現はれたのである。かゝる

直觀的世界觀は、流轉する現象の總形像を全面的性質において示すに足りるが、總形像の個々の構成分を説明するに足りないのはもとよりのことである。自然科學は、この構成分を理解せんとして、しばらく事物をその歴史の流れからの分離において、個別にその性情、その特種の原因結果等に就いて考察せざるを得なかつた。まことに自然科學は、尺取蟲の螟蛉のうちだけでも頭に二八八本の、軀に一六四七本の、胃と腸とに二一八六本の筋肉を解剖學的に示し得たのである。代りに、自然は歴史的に發展するといふ觀念が後方に退き、個別の理解から全體の理解への途は塞がれてしまつた。それはまた、ベエコンの理論的思惟に忠實に反映して、當代の理論的思惟となつたのである。

#### (四)

一定の理論經濟學の方法論は、何よりも先づ下において、その時代の經濟的社會的存在によつて規定されるが、上において、その時代の、右の意味を擔ふところの理論的思惟によつても制約される。近代の社會主義理論はその著しい例である。それは、その内容よりすれば、何より

も先づ、一方において近代社會内に存在してゐる所有者及び非所有者、賃銀勞働者及びブルジョアの階級對立、他方において生産を支配してゐる無政府狀態の認識から生成したものであるその理論的の形式よりすれば、然しながら、最初は、十八世紀の偉大なフランスの啓蒙論者によつて確立された根本原理の、一層徹底した、云はゞ一層合理的な發展として現はれたのである。悉ゆる新らしい學說と同じく、近代の社會主義理論も、その根底が如何に深く經濟的存在のうちに存してゐやうとも、先づ在來の學問思想に結びつかざるを得なかつた。だからケルシヤールが、國民經濟學の方法論は、勿論、僅少ならぬ程度において、その他の諸科學、特に自然科學、更に哲學、論理學、數學、法律學における認識の進歩に従ふものであるし、また從來従つてきたのである……ひとは、論理的及び經驗的方法、目的論的及び因果的方法、歸納的

及び演繹的方法を、専らこれら方法の純理經濟學に對する意義に關聯させてのみ語るときといへども、本來既にこれらの概念の適用において、論理及び認識論並びに諸の哲學的基礎科學の一定の知識狀態を前提せざるを得ない、と云ふとき、それは幾分の混亂と表見性のうちにもなほその正しさを有つてゐる。

こゝに、かゝる意味を擔ふところの理論經濟學の方法論を、その發展の姿において批判しやうとする。方法論的批判の意味については、それは、勿論、批判の總てではないが、方法こそ全理論體系の個々の部分を統一に齎すものであることを叙べておけば充分であらう。寧ろ、私をしてこれに赴かしめるものには、何らか積極的な理由がなければならぬ。そして私はそれを有つのである。

いまや社會科學の悉ゆる領域において、ひとつの新たな方法が適用されることによつて、驚

くべき業績が示されつゝある。われわれは、曩の叙述によつても、これが經濟的社會的關係の變革過程の重大な段階の理論的表明であることを理會してゐる。この過程は、經濟的社會的關係のその本質における世界的同一性乃至支配性の故に、また世界的性質を有つてゐる。ひとは、正當にも、自らの特殊性の具象において、他において實現せられた、また實現せられつゝある狀態を實現しやうとする。それは、意識せられた理論が實踐を導きつゝある時代である。

ひとは、現代の研究方向の特殊性を規定して「理論的關心のルネサンス」といふとき、ルネサンス・デ・テオレティクシエン・イン・レ・ツセス無意識のうちにこの社會的狀態を反映させてゐる。變革の理論は、何よりも先づ、方法論的變革として顯はれる。一般に、近代の社會科學は、方法論的な課題な擔ふことにおいて、一層原始的な時代における科學樣式に對して、ひとつの差異を示すべき理由を有つてゐる。認識の發展

の歴史的過程は、一層原始的な時代においては、一般的に人間にとつて、或るものを造ることはそのものを造る方法を知ることよりも重要であり、且つ、前者の事實は、常に、後者に關する明瞭な意識に先んじたことを示してゐる。たとへば古典學派を見やう。嚴正な方法に従つたかに見へるスミスとリカルドは、殆んどそれを直接的に表明しなかつた。セイ、カレエ、マルサスを経て、ジョン・スチュアート・ミルの「論理學體系」に至つて、始めて古典學派及び全精神科學の方法論が體系的に展開されたのである。而して、理論經濟學において、方法論が眞摯な論議の對象となつたのは歴史學派以後のことである。それ故、シユムペーターが、方法論は國民經濟學體系の終りに生ずべきもので、その首めに生ずべき性質のものではないと云ふとき、それは右の意味に解したときにのみその正しさを有つのである。現代の變革の理論は、然しな

がら先づ、從來のこれら凡ての方法論に對立する新たな方法論となつて顯はれるのである。寔にわれわれは、流轉して止まない經濟的社會的生活の炬火に照しつゝ、諸の方法論は如何なる點において破綻しなければならなかつたか、また現在破綻しなければならぬかを分明にして、この過程において正しい方法論を認識することを措いては、一步前進と雖も不可能である。

## (五)

フュジオクラテンと古典經濟學の方法論を問題とするまへに、先づ、われわれは曩に叙べたブルジョアジイの輝やかしい發展の黎明期を表象に有つてゐやう。それらは、この階級のこの段階における理論的表明以外の何ものでもないのであるから。

われわれは、歴史に遡ること遠ければ遠い程、個人は、また生産する個人は、非獨立的なもの

として、一層大いなる全體に益々從屬して現はれることを知らされる。野蠻時代においては、個人の傷害的行為を、彼の屬する社會圈すなはち全家族又は種族が處罰せらるべき罪科と看做す傾向があつた。個人と總體との融合は、個人の行為が嚴密な意味において個人的なものではなく、各人相互のある連帶から生起してゐるのであると云はれ得る程に事實上緊密であつたし、判決する者も、罪科を犯した個人を、彼がこの罪科以外の一切の關係において結合してゐるところの群から區別することが能きなかつたのである。であるから私的復讐において、個人が個人を傷害したことから屢々全家族と全家族との戦ひが醸され、しかもこの戦ひは數世代に及ぶものがあつたといふ。かゝる習俗は後年種々なる遺制となつて現はれてゐる。例へば、ゲルマン人において出生の差異が同時に權利の差別の基礎となつたのは、恐らく、守るにも攻めるにも全

家族が個人の背後に存在してゐた絶對的家族連帶の時代の影響であらう。また例へばザクセンにおいて、殺人者が被害者の遺族に支拂ふべき賠償金は、貴族に對する場合は平民に對するそれの七倍であつたことは、大なる力強い家族はその一家族員の殺害に對して普通の家族よりも遙かに怖ろしい復讐をなし得たしまたなした、と云ふ事實が法律的に確定されたものと見られやう。種族の對立と融合とから生じた種々の共同體に移つても、それは本質的な差異をみなかつた。例へば、ドイツ法においては、法の原則は共同體に對しても個人に對しても同一であつた。それは個人と共同體とが緊密に結合してゐたので、ローマの國家概念の全盛のときのやうに、公法と私法との區別を必要としなかつたのである。ルネサンス時代に至つて始めて、一方において、完全な個性を發達させ、他方において、狭い社會的還境の限界を遙かに超越する意



向と教化とを發達させた。これは、例へば、「自分はフィレンツェを熱愛してはゐるが、魚にとつては大洋がさうであるやうに、自分並びに自分のやうな者たちにとつては世界が祖國である。」と云つたダンテの言葉に適切に表現されてゐる。寔に、中世後半期のイタリア人は、近代的の發見民族であり、世界は意外に小さし *il mondo è poco*、と云ひ得た最初の民族であつた。ルネサンスは、ブルジョア社會を準備したところのものである。それは、十八世紀において長足の進歩を遂げた。この自由競争の社會までくると、個人は、過去の歴史時期に彼が制限せられた一定の人間の集團に從屬せしめられたところの自然の束縛から完全に解放されたものとして現はれてくる。以前は、ひとびとは、共同行為への共同意志によつて結合されてゐた。いまやひとびとは、相互に分離して、私的個人として相對立し、獨自の意志によつて、獨自の危険

において行動するのである。事實は、一方において、封建的社會形態の所産であり、他方において、十六世紀以來新たに發達せる生産力の所産であるところの歴史的個人は、自然的個人として、與へられたところのものとして、現はれてくる。

古典經濟學において、かゝる、歴史的に發達せるものとしてではなく、自然によつて置かれたものとしての、ロビンソンの單獨孤立の個人が研究の出發點となつたのは、右のやうな歴史的段階に對應するのである。従つて、個人主義的方法論は、また同時に非歴史的的方法論である。すなはち、フュジオクラテン及び古典經濟學において、資本家の制度は、歴史的生成物としてではなく、社會的生產が歴史的に通過するところの發達段階としてではなく、自然によつておかれたものとして、自明なものとして、過去の諸々の發達段階はこの段階を準備した

ところのものとして現はれた。それ故、古典經濟學に現はれる經濟的範疇は、社會的、歴史的、範疇ではなくして常に、不變なる自然的範疇であり、その法則は常に、永遠に妥當する自然法則として定立されてゐる。この方法論の故に、古典經濟學は現實の社會的動態の前にその無能を露呈しなければならなかつたが、しかしそれだからと云つて、この方法論の故に、古典經濟學を誹謗するのは見當ちがひである。それは、この齟の首めに展開したところの歴史的段階に對應するものであり、その故にまた、この段階においてのみ意味があつたのである。それは、後代意識的にこの方法論をとり入れて興亡する諸の理論體系と同一に論ぜらるべきものではない。たとへばフュジオクラテンは、*Ordre positif* と *ordre naturel* との二つの秩序をみとめる。ひとは、前者によつて封建制度を、後者によつて資本家的生産關係を理會した。それは、この生

産關係のもとにおいては、富の生産及び生産力の發展が自然法則に従つて行はれてゐることを意味しやうとしたのである。従つて、かゝる關係自らは、時代の影響と無關係な自然法則である、それは、恒に社會を支配すべき永久的法則であるといふことになる。だが、われわれは後に、この非歴史的、方法論が、悉ゆるニュウアンズと悉ゆる粉飾とを有つて、諸々の理論體系に沈潜してゐるのを見るであらう。私を以て見れば、蓋言すれば、凡ゆるブルジョア經濟學は、或はそれが何らかの價值論を有つならばこの全理論體系の中核をなすところの根本理論の方法論において、或はその發展理論の方法論において、この方法論を超克し得なかつたし、また現在超克し得ないが故に、現實の社會的動態のまへに破綻しなければならなかつたし、また現在破綻しなければならぬやうに思はれる。われわれは、この故に、古典經濟學の中核にたちいたつ

て、即ちその價值論を分析しつゝ、この方法論を一層嚴密に規定してあかなければならない。

近代經濟學が最初に提起した問題は「富とは何ぞや」であつた。すなはち、富の本質に關する問題であつた。富は、然しながら、一定量の使用價值であり、使用價值は、人間對自然の作用の所産にほかならない。即ち、茲に問題となつてゐるのは富の自然的側面である。富の社會的側面、人間對人間の作用の所産としての富、すなはち富の形態に關する問題を、それらは全く提起するところがなかつた。これは、その思惟の無意識的前提となつた資本家的社會が、自然的なもの、「永遠の相のもとに」あるところのものと看做された場合の必然的な歸結である。茲に私の所謂非歴史的方法論の胚芽がある。この胚芽が發展してそこに近代經濟學の最初の巨大な體系が生長する過程を私は見やうとするのである。この問題を最初に、理論的に考察したもの

は、言ふまでもなくモネタール・ジユステームとマーカンテイル・ジユステームとである。それらは、然しながら、この問題を、表面的な流通過程において解決しやうとした。前者は、富をなほ對象的に、貨幣に現はれてゐる有形物において解釋した、後者において、富は單に相對的なものとして現はれる。一人の獲るところのものは、他人の喪ふところのものである。それ故に、ひとつの國內においては、資本全體として看れば、富は形成されない。それは、他の諸の國民に對する一國民の關係においてのみ起り得ることである。ひとつの國民が他の諸の國民に對して實現する過剩額は、貨幣(貿易差額)に現はれる、何となれば、まさに貨幣は、交換價值の直接にしてまた、獨立的な形態であるから。茲にはモネタール・ジユステームに較べて明かにひとつの進歩が行はれてゐる。富の源泉は、對象から、主體の一定の勞働即ち商業勞働

及び、マ、ニ、ユ、フ、ア、ク、チ、ユ、ア、勞働に移されてゐる。この勞働自らは、然しながら、貨幣を齎すものとしての限定性において解釋されてゐる。彼等は、絶對的富の形成を否定して、賣却から生ずる富を認めたのである。

フュジオクラテンは、然しながら、まさにこの絶對的富（剩餘價值）に彼らの問題を見たのである。剩餘價值は、流通過程からは生じない。ひとは、商品の賣却において、その商品に含まれると同じ價值を單に貨幣において得るに過ぎない。されば、この餘剩價值は、即ち資本は何處から生ずるのであらうか、これが彼らの課題であつた。彼らは初めて、この問題の考察を流通過程から生産過程に移したのである。そしてこの功績が、彼らに「近代經濟學の父」といふ榮譽を擔はしめてゐる、何となれば、この學派はそれによつて、初めて資本家的生産の

本質を剩餘價值の生産に置いたのであるから。さて、資本家的生産の發展の基礎は、勞働者に所屬する商品としての勞働力と、それと獨立に存在する商品としての諸勞働條件との對立である。商品として重要なことは、勞働力の價值の決定である。この價值は、勞働力の再生産に必要な生活資料をつくり出すに要する勞働時間、又は勞働者としての勞働者の生存に必要な生活資料價格に等しい。この基礎の上にのみ、勞働力の價值と利用の差異、他の如何なる商品にも存在しないこの差異が現はれるのである。そこで、フュジオクラテンの體系の中軸に、歴史的發展段階によつてではなく全く自然に決定せられるところの、不變の大いさとしての最低勞賃、所謂 *strict necessaire* が置かれる。彼らは、價值自らの性質について未だ認識するところがなかつたが、この勞働力の價值は必要生活資料の價格

に、從つて一定の使用價值量に現はれるといふ理由のもとに、この決定をなし得たのである。この勞賃論の前提のもとに、剩餘價值をつくり出す勞働は生産的勞働である、といふ根本命題が定立される。即ちこの勞働生産物においては、その生産物の生産過程において費消された價值額を超へる價值が含まれてゐる。價值は物質よりなるといふ表見的な見解のもとにおいて、これに對應する唯一の表見的な剩餘價值生産部門は農業である。この原始生産においては、勞働者の年々消費する生活資料の額は、彼が生産する生活資料の額よりも僅少である。即ち剩餘價值は茲に最も表見的に現はれる。そこで、フェジョクラテンにおいて、農業勞働は唯一の生産的勞働で、そのみが彼らの所謂 *produit net* をつくり出すものであり、地代は唯一の剩餘價值形態となつたのである。彼らにおいて工業利潤と貨幣利子とは、地代が分配され一

定額において地主の手から他の階級の手に渡る關係を示す名目の外の何ものでもない。そこで農業勞働者は、*strict necessity* に憑つて、これ以上を生産し、この剩餘は地代となり、この剩餘價值は勞働の根本條件即ち自然、土地の所有權者によつて占取される。だから茲ではこはいふことになる、彼が生産の間に費消する使用價值量は彼がつくりだす使用價值量よりも僅少である。これは、土地の生産力は、與へられたものとして前提されてゐるその勞働日において、彼が生産するために必要とする消費量以上に生産する可能性を彼に與へることを前提してゐる、隨つて、剩餘使用價值量は自然の賜物として現はれる。他方において然しながら、地主は勞働者に對して資本家として對立するといふこと、即ち地主は、勞働者が彼に商品として提供した勞働力を購なふかはりに、等價物のみならず勞働力の利用が齎す剩餘物をも占有するとい

ふことが自明的に前提されてゐるのである。こゝにおいて、この體系の内部に矛盾が展開する。最初、商品交換の基礎にもとづく他人勞働の占有によつて剩餘價值を説明したこの體系において、事實は然しながら、價值一般は社會的勞働形態、剩餘價值は剩餘勞働ではなくして、價值は單なる使用價值、單なる物質であり、剩餘價值は單なる自然の賜物にすぎない、地代は、一方において勞賃を超える剩餘價值に還元されながら、他方においてこの剩餘價值は社會からではなく、自然から、社會的關係からではなく土地に對する關係から抽出されてゐる、といふことが茲に露呈するのである。これが非歴史的な法論の齎した歸結である。この學派が、農業勞働といふ特定の現實勞働のみが剩餘價值をつくるとみた迷蒙はしばらく措くも、資本家的生産形態を社會の生理學的形態即ち生産それ自らの自然必然性から出發して、意志、政治等より獨立し

た形態として即ち物質的法則として把握したことは、その偉大な功績であつたのであるが、それは、人間社會の、歴史的に規定せられた、一定の段階においてのみ作用する法則としてではなく、自然的な、悉ゆる社會形態を同一に支配するところの法則として把握された。この體系の誤謬はまことに茲に基いてゐる。この體系の内部における封建的社會と資本家的社會との右のやうな矛盾はまた、當時の社會的存在の反映に過ぎない、ひとは、この體系が、農業が優位を占めたフランス封建社會の殻をまさに破らんとしてゐたブルジョア社會に對應することを想へ。

アダム・スミスは、商業・マヌファクチュア・農業の如き現實勞働の特殊形態が、順次に、富のまことの源泉であると看做されてきた後を承けて、勞働一般をもつて、それが如何なる使用

價值に顯はになるかを問はず、しかも分業としてのその社會的總姿容において、素材的富或は使用價值の眞の源泉であると主張する。スミスは、茲において、自然要素を全く看過して、社會的な富即ち交換價值の領域、この古典經濟學の迷宮に迷ひこむことになるのである。スミスは商品ラベリンスの交換價值をその生産に必要とする勞働量によつて決定するといふことを、一定量の生きた勞働を購ひ得る商品量又は同じことであるが一定量の商品を購入ひ得る生きた勞働量によつて決定するといふことと絶へず混同してゐる。即ちスミスは、勞働の交換價值、實際には勞賃を商品價值の尺度とする、何となれば、スミスはフュジオクラートの勞賃を「勞賃の自然價格」といふ姿で承けついでゐるが、それはなほ一定量の生きた勞働を以て購ひ得る商品量、又は一定量の商品をして購ひ得る勞働量に等しいとさ

れてゐるから。即ち茲では、價值が價值によつて決定され説明されてゐる、*cercle vicieux* といわれわれは、價值を價值によつて説明し得るためには、如何なる條件が前提されなければならぬかを見やう。それは、對象化された勞働條件と單なる勞働力とが商品として獨立に對立してゐないといふこと、即ち勞働者は常にその生産物を生産するのみならず、またそれを自らの計算において賣却するといふことを前提としてゐるのである。この場合においてのみ勞働の價值は勞働生産物の價值に等しい。右の二つの商品が、然しながら、異なる社會階級に屬する資本家的生産方法においては、まさにこれと反對のことが行はれる。茲において生きた勞働が資本と交換される場合を見るに、それは自らが交換されるところの對象化された勞働に較べて一層小さい價值を有つてゐる。一定量の生きた勞働の價值である勞賃は、この生きた勞働によ

つて生産されこの生きた労働を代表する生産物の價值よりも常に小である。従つて、商品價值が關する限りそれはその生産に費された労働量又は労働時間によつて決定されるといふスキスの正しい一般法則は、茲においては廢せられたやうに彼には思はれる。そこでスキスはこゝに結論する、労働條件が土地所有と資本との形態において労働者に對立するやうになるや否や労働時間は商品の交換價值を決定する内在的法則たることをやめる、と。かくして商品價值を決定する眞の法則はブルジョアの失樂園<sup>パラダイス・ロスト</sup>へ追放されてしまふのである。

ダヴィド・リカードは、スキスと異り、労働量による商品價值の決定を純粹に仕上げた。そしてこの法則は、表見上それと最も矛盾する資本家的生産關係をも支配することを示した。リカードは、然しながら、この労働の性質を、交換價值を造出するものとしての又は交換價值に

現はれるものとしての労働の特殊的规定を、究明しなかつた。従つて、この労働と貨幣との關係に就て、商品の交換價值の労働時間による決定と商品の貨幣への進行の内在的必然性との關聯に就て、全く理解するところがなかつたのである。彼の貨幣理論の謬想はこゝに基く。即ちこの點が關する限りにおいてリカード價值論はスキスのそれを些さかも發展させてはゐない。リカードにおいて最初から問題となつたのは價值の大小であつた。等しく社會的存在に制約されて、富を問題としたスキスの後を承けて、リカードは分配論を前面に推しだす。彼は然しながら分配を狹義に解して、生産物の分配とする、しかも、既に叙したところから明らかなやうに、生産物の分配は同時に諸々の生産領域への人間の分配及び諸々の生産領域における彼らの對立的地位の規定を意味するといふことを全く理會しない。價值はまづ分配の尺度である、また尺度が



能ふ限り精密であることは悉ゆる尺度に望まれるところであるから、リカードはこの經濟的範疇——それは、從つて、彼においては常に不變なる自然的範疇として現はれる——能ふ限り量的に固定しやうとする。今や、それから如何なる歸結が得られたかを見やう。彼は、勞働者の自然的最低生活標準額と勞賃との同額並びに有名な勞賃鐵則説に到達する、これによつて、然し、集積の機構と資本主義の歴史的人口法則の透察を妨げられてしまふのである。同様に彼は、收穫遞減の法則を狭く解して、地代の昂騰を資本家的社會に固有な運動法則とする。從つて、その歴史的限界が利潤率の低下となつて顯はになるところの資本の支配的役割を容易に看過してしまふのである。

これを要するに、スミスと等しくリカードは、即ち古典經濟學は、商品の殊に商品價值の分析から、商品價值をまさに交換價值たらしめると

ころの價值形態を見いだすことができなかった。彼らにおいて、價值形態は商品の性質そのものとは無關係なものとして取扱はれてゐる。勞働生産物の價值形態は、資本家的生産方法の最も抽象的なしかしまた最も一般的な形態であつて、資本家的生産方法は、これによつて社會的生産の特殊な一様式として徴表された同時に歴史的に徴表される。それ故に、資本家的生産方法を社會的生産の永遠な自然形態と見た古典經濟學は、必然的にまた、價值形態の從つて商品形態の特殊性、及びそのヨリ以上の發展形態たる貨幣形態、資本形態、等の特殊性を容易に看過してしまつたのである。トインビーは、イギリスにおいて研究されたつたこの科學（經濟學）のひとつの弱點は、それが餘りにも歴史から離れてゐたことである、といふ。オウエン君の平行四邊形が、ブルジョアの社會形態以外にリカード君の知つてゐた唯一の社會形態のや

うに思はれる、と揶揄されたリカードは措いても、優れた歴史的感覺を有つたアダム・スミスもこの非歴史的的方法論を超克することができなかった。古典經濟學は、無意識のうちに、資本家的生産といふ利那にむかつて、美はしい者よ止まれ、といふ。洵にひとは、美はしいものを「永遠の相のもとに」sub specie aeternitatis 眺めやうと思ふ。藝術の特に美術の優れたる作品のあるものに、この心理が働いてゐることを否むことはできない。われわれはまた、歐洲における個人主義一般についての歴史家といはれるブルックハルトが、その憧憬するイタリアの文藝復興期の文化を取扱つたときの非歴史的な方法を知つてゐる。然し科學の領域においては、非歴史的的方法論をとる者は常に次のことを覺悟せよ。

Werd' ich zum Augenblicke sagen:

Verweile doch ! du bist so schön !

Dann magst du mich in Fesseln schlagen,

Dann will ich gern zugrunde gehn !  
Dann mag die Totenglocke schallen,

## (六)

古典經濟學の吊鐘は、社會的動態——恐慌によつて鳴らされた。矛盾は運動の母であるといはれるならば、資本家的生産方法の悉ゆる矛盾の最も包攝的な爆發であるところの恐慌は、まことに資本家的社會の運動にひとつの飛躍を與へるものであると云はれやう。恐慌は最早、セイの如く經濟生活の豫定調和的な正常狀態を觀念することによつてその現實を否定し得ないものとなつた。それは、十九世紀の經過中經驗したところによつて、ある週期的現象であることが明らかにされた。

一八一一年、一八一五年及び一八一八年にイギリスを襲つた恐慌は、いまだ、本來外部的な性質を有つてゐた。それは、イギリスを或る期

間ヨーロッパの販賣市場から人爲的に遮斷したナポレオンの大陸封鎖令と、大陸封鎖撤回の後に於いてイギリスの生産物に對する豫期の販路を縮小せしめたところの、長期に亘る戦争による大陸の物質的疲弊とによるものであつた。固有の意味に於いての恐慌は、一八二五年及び一八三六年に再たイギリスを襲つた。然しながら、資本家的生産のメデュサの首を初めて顯はにしたものは、一八四七年の世界商業恐慌であつた。一八四五年の秋の鐵道株思惑師の集團的敗北の中にすでにその萌しをみせ、一八四六年には目睫の間に迫つた穀物税廢止等の附隨的な事情によつて抑止されてゐた恐慌は、遂に一八四七年の秋ロンドンにおける大植民地物産商の破産となつて爆發した。まことにこの恐慌が、二月及び三月革命の眞實の母となつたのである。一八五七年の恐慌は北米合衆國よりイギリスに及び、プロイセン、ハンブルク、スカンデ

ナヴィアに亘り、ハンブルクを介して南アメリカ諸國に擴がつた。一八六四年及び一八六六年のイギリスにおける比較的小規模な金融恐慌の後をうけて、一八七三年に可成り大規模な恐慌がオーストリアに勃發した。それはドイツに亘りイタリア、ロシア、北アメリカ、イギリス、オランダ、ベルギーに擴がり、南アメリカ及びオーストラリアに波及した。恰かも、六十年代末七十年代の首めは、オーストリア及びドイツに於て、所謂産業自由の原則が確立せられたときにあたる。すなはちドイツは、一八六九年六月廿一日の産業規則によつて、北ドイツ同盟ドイツ帝國の全領域に亘る法を統一し、一八五七——一八六一年に成つた一般ドイツ商法典は、一八六九年六月五日及び六月十二日の法令によつて、夫々ブンド法及びライヒ法となつた。油然と勃興しつゝあつた産業活動は、この恐慌の侵すところとなつた。この恐慌は、イギリスに

於て一八七八——七九年に底をつき、一八八一——八三年の好況期を経て、一八八五——八六年の不況期を現はした。ひとは、これに伴隨する、フランス大革命に續く、デアアドコスの闘争も戯畫化されてみへるところの、西歐のプロレタリア運動を想へ。一八一五年に、イギリスにおいて、素朴なラッダイト運動が恐るべき程度に展開した。一八三一年には、労働者の最初の一揆がリヨンに起り、一八三〇年七月革命の影響をうけて、一八三八——四二年には、最初の全國的労働運動をなすところのイギリスのチャーティスト運動がその頂點に達した。一八四八年には、革命のけいれんが大陸を風靡した。既にシスモンディは、この現象に面して古典經濟學の神嚴性を懷疑した。ジョン・ステュワート・ミルの體系は、この矛盾を調和しやうとする古典學派最後のイデオロギーであつた。自然科學的方法を倫理諸科學に適用することによつ

て、後者の遅々たる進歩を救はなければならな  
いとしたミルは、かゝる事情に促されてコムト  
の *Théorie des trois états* に結びつき、古典經  
濟學の靜態的社會觀に木に竹を接ぐやうに動態  
的社會觀を導入したのである。

## (七)

本來國民主義を奉じた古典經濟學は、然し世  
界主義的な姿をもつて現はれた。それは當時英  
國の特殊な對外的地位に基づいてゐる。ポルト  
ガル、スペインに始まつた近世初期の植民貿易  
の爭覇戰が、オランダの隆盛時代を経て、イギ  
リスの勝利に終つたことはひとの知るところで  
ある。エリザベス女王朝乃至クロオムウェル時  
代の近世國家の重商主義政策は、世界市場にお  
けるイギリスの獨占的支配の楨杆となつた。イ  
ギリスは最早、何らかの育成關稅の障壁を是認  
するために、その特殊の事情を強調する必要を

みなかつた。だから、古典經濟學に對する反動のひとは、まさにこれと反對の事情のもとにあつたドイツに起つたのである。まことに十九世紀前半のドイツを見よ。それは、特にイギリスに較べて、殆んど一世紀遅れてゐた。この世紀の首めにおいてドイツ全人口の約 $\frac{2}{3}$ は農業人口が、 $\frac{1}{3}$ は商工業その他が占め、田園人口はその $\frac{3}{4}$ を、都會人口は $\frac{1}{4}$ を占め、世紀の中葉までこの状態を持続した。當時イギリスにあつては紡績業と鐵工業の製造方法は大なる變革をとげ、製品の價格は低下された。農業國としてのドイツは綿絲と銑鐵を大量にイギリスから輸入せざるを得ない。全輸入額の $\frac{1}{4}$ は綿絲であつたといふ。まことに、紡績業と鐵工業の、イギリスよりの、解放闘争は、次の數十年の間ドイツの經濟的發展の重要な部分を占めたのである。恰かも一八三三年にはドイツ關稅同盟が成立して十八聯邦、七千七百万哩、二千三百萬の人口

を包含する國內市場が拓かれた。一八三五年には、はじめて、ニュールンベルク——フュルト間に鐵道が敷設された。一八三九年には、ベルリン——ポツダム、ブラウンシュヴァイク——ウォルフエンブツテル、一八三九年には、ライプチヒードレスデンと發展して、一八四五年には二、一三一籽、一八五〇年には五、八二二籽となつた。これに伴つて道路が開鑿せられ、一八四二年にプロイセンのシュタインシャイト國道は一、三一・六哩となつた。ドイツのかくも飛躍的な發展を目のまへにして、その重工業すなはち紡績業と鐵工業はイギリスの壓迫のもとに悩んだ。紡績業については、一八四〇——四二年を平均して、關稅同盟の棉花輸入額二四二、七二〇ツェントナーに對し、綿絲輸入額四〇〇、八七三ツェントナーで、ドイツ木綿工業材料の實に約 $\frac{2}{3}$ を占めてゐたのである。一八四二年にはドイツ關稅同盟の銑鐵生産額三百ツェント

ナ―に對し輸入額は二、三五五、四〇八ツェントナ―であつた。ドイツの紡績業者と鐵工業者は、これらの重工業を獨立させるために――一八九八乃至一九〇〇年平均棉花輸入額二九八、九〇〇噸に對し、綿絲輸入額は一〇、九〇〇噸（ドイツ木綿工業原料の $\frac{1}{30}$ ）に減じた――綿絲と銑鐵に對する保護關稅を要求した。これが、ドイツ歴史學派の母胎である。

## (八)

社會的動態はまた、時代の理論的思惟に反映する。すなはち、ドイツにおいて、第二の辨證法が發展する。カントによつて提起された辨證法はフイヒテ、シェリングを経て、ヘーゲルにおいて自然、歴史及思惟を一貫する發展概念としての姿を有つた。カントによつて哲學的思惟の中心に置かれたものは、數學的自然認識であつたが、ヘーゲルを導いたものは、世界史であ

つた。法律學の分野においてはアイヒホルン特にサヴィニーによる歴史的研究法が唱導され、言語學の分野においては比較言語學の諸の法則が定式されつゝあつた。

## (九)

上はかゝる思惟方法に制約されつゝ、下はドイツ資本の保護關稅運動に規定されて、ドイツ歴史學派は登場した。それは、まづ、國民經濟の特殊性を強調する。これは、たとへば、ヴィルヘルム・ロツシャ―の次のやうな見解となつて顯はになる。國民生活を取扱ふ悉ゆる科學において、二つの主要問題が區別される。それは *Was ist?* と *Was soll sein?* とである。尤も、國民經濟學の如何なる體系と雖も、専らこの問題提出の一つを以て満足はしないであらう。然しながら、この何れかゝ決定的重要性を有つに従つて、（現實的）生理學的又は歴史的方法と理想的

方法との對立が現はれる。理想的方法は一般に經濟學に適用さるべきではないのである。諸の民族に一般に妥當する經濟的理想なるものは存しないのである。ひとは、たかだか、純粹に歴史的に、理想、ユトピアの變轉を叙べうのみであらう。國民經濟學にとりては、寧ろ、歴史的又は生理學的方法が問題となる。國民經濟學は、云はゞ、國民經濟の解剖學と生理學とを取扱ふのである。この觀念は、カール・クニースにおいて、一層鋭くされた。「理論の絕對主義」は、嘗て古典經濟學の「世界主義」コスモポリチスムスと「永遠主義」ペルペチュアリスムスとなつて顯はになつた。經濟學說においては寧ろ、「相對性プリンチプ、デア、レラチヴィテートの原則」が主張せらるべきであらう。諸の國と時代における國民經濟的事情及現象の比較にあたり、問題たるのは現象の類似であつて、自同性ではない。得らるべきところのものは、類似の法則であつて、絕對同等な

る因果關係の法則ではないのである。

歴史學派は、具體的なものを欲する。これはまた、抽象的理論に對する深い嫌惡に表明されてゐる。たとへば、クニースの見解を想へ……現實からの抽象は、二つの大いなる危險を胎んでゐる。それは、まづ、分離し難く相互に交互關係にたつところのものを思惟において分離せしめる。つぎに、何らかの前提を結論の基底におくこととなる。この前提たる、現實とは異なるところのものであり、従つて正しい結論に到達し得ないであらう。

従つて、歴史學派は、社會的—經濟的生活を生活過程の他の方面から分離しない。たとへばロツシャーが、國民經濟學は、發生的性質ゲネーライシエを有つ、それは經濟的國民生活の發展法則の學である。國民生活はひとつの全體性を有ち、その個々の部分は有機的に關聯する。従つて國民經濟

學は、諸の科學と密接な關聯に立つ、と云ひ、クニースが經濟學はひとつの有機的全體であると云ふとき、このことを表明してゐるのである。これはまさに悉ゆる抽象に對する彼等の嫌惡の結果である。

歴史學派のこれらの徵表は、グスターフ・シュモラーとカール・メンガーの方法論的論争において、云はゞ最後決定的な表現を與へられた。抽象又は孤立<sup>アイソレーション</sup>方法<sup>メソッド</sup>を用ひてのみ、すなはち本質的なものを非本質的なものから分離するときのみ、法則は定立されると云ふメンガーの説に、シュモラーは自説を對立させる。・・・孤立のために如何なる導きの絲があるか。恣意的な孤立は、正しからざる結論への路である。メンガーが「孤立は極めて容易である。何となれば、それは、本質的なものを偶發的なものから分離するにある」と云ふとき、それは單なる言葉の遊戲に過ぎない。何となれば、現象世界

の不可分離的全體性において、偶發的なものは何であらうか。シュモラーは、從つて、メンガーの所謂解剖學的個別的研究法に深い嫌惡の情を懷抱せざるを得ない、前者を以て觀ること、メンガーは、常に、靜態經濟 *statische Wirtschaft* を、一定の現在經濟狀態を考察して、全經濟は不斷の無機的な發展過程にあることを考慮しない、彼は孤立せる個の面、すなはち現實の經濟的面の敘述を以て満足してゐる。彼が因果法則に到達した結果は、大いなる程度において、全國民經濟學に對する重點を、かゝる法則が定立されまた適用さるべき二三の分野に、すなはち恣意的に經濟の範域において高い意味を有つところの貨幣價值説及び價格説におかなければならなかつた。シュモラーは、シグワルトを引用しつつ、ひとは無條件に「個別を全體の一部」と觀ずべしといふ、悉ゆる科學は、それが法則を欲するならば、抽象を缺くことは能ない、然し



ながら、それが正しく抽象し得るためには、即ち恣意的に、解剖學的に分離し云はゞ暴力的に孤立の状態に置いて關聯を離れて觀じないためには、まづ手段が知悉されなければならぬ。ひとは、この問題が今世紀の始め、新オーストリア學派の一人オトマール・シュバンによつて、Individualismus と universalismus との對立の形式において、再燃したことを想へ。

歴史學派は悉ゆる普遍化を拒否するところの經驗主義に憑つて、悉ゆる科學の最も重要な概念すなはち法則の概念を懷疑し、經驗的、又は統計的研究によつて確立されるところの經驗的法則のみを認めることによつて、理論的に支離滅裂の體系となつてしまつた。しかし、この學派において、その唯一の正しい「發展」理論が如何なる運命に逢着したかを問題としやう。新歴史學派華やかなりし頃は、またビスマルクのソチアリステンゲゼツツ社會主義法華やかなりし頃である、寔にそれは

西歐のブルジョアジイにとつて多事多難の秋であつた。一八四八年の六月このかた、西歐の舞臺から消ゆることなかつた「赤い幽靈」は一八七一年にバリ・コムミュンとなつて顯はになつた。恰かもこの年プロシヤ王はドイツを統一したとみるや、漸やく擡頭しつゝあつた資本主義のもとに夙に先進西南ヨーロッパのプロレタリアートの階級意識を意識となし得てゐたところのドイツプロレタリアートに當面した。かくしてビスマルクの血と鐵の政治が現はれた。かゝる情勢のもとに、發展の概念を經濟學にとり入れた歴史學派はこれを如何に扱つたか、ひとはその所謂經濟發展段階なるものを想起すれば充分であらう。茲に經濟發展の契機となつてゐるものは消費、交換、分配等々である。かゝる契機を以て經濟的發展を眺むるとき、ひとは、原始共產制とギリシャ・ローマの古代奴隸經濟と中世封建時代の莊園經濟とを包攝する一「段階」

を指定するやうな歸結をまねくのである、例へばビュツヒヤーを想へ。新舊歴史學派は、古典經濟學の永遠主義に反逆したといふ。然しながら、それは「發展」概念の展開において、所謂「國民經濟」すなはち資本家的生産方法をもつて人類の歴史の最高にして最後の段階なりとする非歴史的方法論を露はにした。これは過去の問題として葬り去らるべきではない、たとへばゾムバルトを想へ。「經濟生活の秩序」ドイツ・オールドメンク・デス・クイルト・シヤフツ・レーベンスにおいてかゝる契機として示されたところの經濟組織は、「(一)一定の精神によつて支配せられ、(二)一定の秩序及び組織を有し(三)一定の技術を應用してゐるところの精神上の統一と考へられる經濟方法」(傍點は筆者)と解せられてゐる。茲に列序された契機は實は統一的に理會されてはゐないのである。一定の精神、一定の秩序及び組織は、一定の生産の社會的形態すなはち生産手段に對する労働者の關係から生ずる歸

結にすぎない。技術とは自然に對する人間の關係を示す自然的範疇である、われわれが、然しながら、社會における生産の諸形態を問題とするとき、問題となるのは生産の技術ではなくして、労働において人々が相互にたつ關係である。まことにゾムバルトはこれらの契機を組合せて、社會主義社會をも示しうると云ふ。嗤ふべきことは歴史に絶へない、それは凡ゆる批判的な時代に繰返されてゐるのである。資本家的生産の提出した恐慌の問題は、たはいもない發展段階に置きかへられてしまつた。

# (十)

今世紀に入つて資本主義は、明らかに、ひとつの轉換期を経験した。ひととはこれを徴表して、單なる資本の支配から金融資本の支配への轉換期とも云ひ得るであらう。産業資本は、嘗て、それを使用する産業家に屬した。株式會社と銀

行の發展、有價證券の大量取引の成立は、この二者を分離させる。寔に資本主義の現段階を、この分離が残るところなく行はれたところの最高段階として徵表することが能るであらう。十九世紀の七十年代において、特に普佛戰爭と、つゞくドイツにおける泡沫會社簇生時代の公債發行によつて全世界の有價證券高は増加を示してきたとは云へ、一般に同世紀の最終三十年間は増加は比較的緩慢であつた。すなはち世界有價證券發行總額は一八七一一八〇年、七百六十億フラン、一八八一—九〇年、六百四十億フラン、一八九一—九〇年、六百四十億フラン、一八九一—九〇〇年、一千億フランであつた。然るに、一九〇一—一〇年に至つて、それは一千九百七十億フランとなつて、殆んど倍加してゐる。これは、こゝに問題とする限りに於いて、巨大な金利生活者階級の生成と金融寡頭政治家の支配との發展過程を示してゐるのである。金利生

活者階級は、一般に生産過程から遊離し、しかのみならず、流通過程からすらも遊離した層を包攝する階級である。しかるに、金融寡頭政治家は、さきに生産過程から遊離した一部ブルジョアジイが、資本が金融資本に轉化する過程において、たとへばトラストの組織者及び指導者として、再び生産領域に登場した姿である。轉形期のブルジョアジイの内部には一見完たく背反するイデオロギイを有つ二つの大いなる層があらはれる。前者が消費的であり、主觀的であり、非歴史的觀點に立つに反し、後者は、ひとつの全體を表明するところの企業組織に入込むのゆゑに生産的であり、著しく個人主義的な色彩を缺いてゐる。われわれは後者の最も發展した型をアメリカにおいて識つてゐる。この二つの社會的存在は、必然的に、それに對應するところの二つの經濟學體系を生む。前者の理論的反映はオーストリア學派として、後者のそれは

アメリカ學派として顯はになつた。

## (十一)

オーストリア學派は表面ドイツ歴史學派の理論的右胎を救はんとして登場した。それは先づリカルドと等しく、價值論を理論的體系の中心におく。まさにオーストリア學派方法論の批判は價值論の方法論的批判である。

フリードリヒ・ウィザーは云ふ、純理經濟學は用ふべき二つの補助手段を有つ、それは *isolierung* と *idealisierung* とである、國民經濟學者は、*homo Oeconomicus* を、孤島のロビンソンを、單純家内經濟のまた單純交易經濟の理想的形像を必要とするのである、と。ベーム・バウエルクはこの學派の任務を定式して、社會科學における理論的研究の支配的方法としての歴

史的及び有機的方法の排撃、及び嚴正な原子論的傾向の復活である、と云ふ。われわれはこれによつて、この學派の出發點をなす所謂經濟主體とは、社會の原子以外の何ものでもないことを知つた。しかもこの原子的個人は、生産過程を遊離してゐるのである。それは心理學的主體として定立される。茲で、われわれはバウエルクの獨特の心理學的方法論を展開しなければならぬ。

オーストリア學派に向けられた主要な方法論的論難のひとつはこうである、とバウエルクは云ふ、それは純理經濟學に措かれた限界を踏みでてゐると。ひとは、限界効用學派の價值學說を指して、心理學的及び生理學的方法なりと云ふ。國民經濟學と心理學との間に、然しながら、瞭らかな限界を設けることは不可能であるし、また合目的ではないのである、とバウエルクは考へる。それは、この二つの科學の發生史的

發展が分明するところである。洵に國民經濟學は、心理學的領域、特に價值論の領域におけるその「限界の踏みだし」によつて、特にこの領域が心理學的欲望説を包攝する限りに於いて、心理學に、非常な刺激を與へた。心理學にして、まづこの領域を嚴正に究明して限界したならば、それは一層の正當さをもつてこの領域を専ら心理學のために占有し得たであらうし、國民經濟學との明確な分離のための前提を可能ならしめ得たのであらう。シュムペーターは、經濟價值説の心理學的基礎づけの大部分を、國民經濟學の價值學説から去れと云ふ。純理經濟學は、然しながら、心理學的諸經驗の利用を簡單に放棄することを得ない。國民經濟學者は、例へばグッセンの享樂遞減の法則 (*Gesetz der Grenznutzenabnahme*) の如き經驗と事實とを引證することなくして、最も不可欠な生活資料の一定量の無價值を説明することを得ないであらう。路は瞭

らかに示されてゐる。われわれは、安堵してしかし用心して、この限界を踏でていゝのである。それは、假令心理學的性質を有つとは云へ普通一般的な經驗の領域から獲きたつた諸の事實をのみ問題とするのであると云ふ理由のもとに、危険を胎むものではない。純理經濟學の正當性と諸成果は、一般的事實の定礎の上にたつものであつて、心理學の學問領域において劃期的な業績が得られたとしても、今日のわれわれの經濟學的認識が根底から覆へされるやうなことはないであらう。

この方法的前提からして、バウエルクは、主觀的心理學的な價值概念を導きだす、すなはち「効用」がその根本概念となるのである。オーストリア學派の抽象的分離方法とはかくの如きものであつた。抽象があらゆる認識に不可欠な要素であることを、われわれは否定するものではない。たゞこの學派の誤謬は、それが

社會現象の研究にあつて、まさに社會關係を捨象した點にある。それは歴史的に變化する人間相互の關係を捨象した。その定立するところの經濟主體はかくて、社會的歴史的範疇ではなくして自然的範疇である。それは所謂現實の出發點にして、それ故にまた、包攝的な契機であるところの生産からではなく、消費から出發する。この誤まつてゐる方法論の故に、社會現象とその發展とを把握する悉ゆる可能性は、最初から、オーストリア學派に閉ざれてゐたのである。それは、理論經濟學の最も重要な部分を成すところの社會的動態—恐慌に關する諸問題に達着して完たき無能を曝露せざるを得なかつた。こゝにも、われわれに馴染の非歴史的的方法論がある。

## (十二)

社會的動態—恐慌のまへに、悉ゆる體系はそ

の非歴史的的方法論の故に破綻を示した。今や所謂理論經濟學は、今世紀に入つて資本家的生産の轉化にともなつて全くその姿を轉じたところの恐慌を、この最も根本的な問題を所謂動態經濟理論によつて解こうとする。私は目下の、日本を包攝する、世界恐慌が背後に有つ凡ゆる問題に近づこうとして、現代理論經濟學の最高に立つと云はれるシユムペーターを首めとする諸々の動態經濟理論を見てゆくことを私の仕事の出發點としやう。生活は最善の教師である、それは誰が正しいかを示すだらう。あらゆる理論は灰色となつても、生活は常夏の緑の樹である。

Wenn zu glauben ist, religiöser Freund, das kann ich dir sagen:

Glaube dem Leben! es lehrt besser als Redner und Dichter.